

実践報告 (Report)

生徒会活動による実行委員会を中心とした 中学校の学校行事の取組についての実践報告

School events conducted by executive committees under
student council: A report on a junior high school in Aichi,
Japan

村瀬 悟*
MURASE, Satoru*

キーワード：特別活動，生徒会活動，学校行事，中学校

Key words : Tokkatsu (special activities), student council, school events, junior high school

1. 実践目標や意義

本稿は，学校行事の準備・運営に生徒会活動による実行委員会が積極的に関わり，学校行事を充実させるだけでなく，学校全体を活性化し，生徒に多様な資質・能力を育むことができたことを紹介する実践記録である。

『中学校学習指導要領解説 特別活動編』には，かねてより「学校行事は，学校が計画し実施するものであるとともに，各種類の行事に生徒が積極的に参加し協力することによって充実する教育活動である。したがって，行事の特質や，生徒の実態に応じて，生徒の自主的な活動を助長することが大切である」（傍点は筆者による）との記述がある¹⁾。さらに，平成（以下Hとする）29年告示の新しい学習指導要領では，学校行事の目標が「全校又は学年の生徒で協力し，よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して，集団への所属感や連帯感を深め，公共の精神を養いながら，第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す²⁾」に改められ，冒頭に「生徒で協力」という文言が追加された。解説ではその意味を「学校行事の事前の計画・準備・実践・事後の活動に分担して取り組んだり，活動をよりよくするための意見や考えを出し合って話し合ったり，課題や困難な状況を乗り越え，解決したりすることを示している」（92頁）と説明している。これらは，学習指導要領において，学校行事の準備・運営に生徒や生徒による組織が積極的に関わることを，より一層，推奨するようになったことを示している。

学校行事の準備・運営に生徒や生徒の組織がいかに関与するべきかについての先行研究は管見の限り数少ない。関連する先行研究のひとつにおいて，山形は，「立候補した生徒が実行委員会を組織し，生徒が主体となり，行事の企画・運営を行った経験」をもとに，実行委員を経験した生徒が意思決定，集団活動，コミュニケーションなどのスキルを向上させることを実証している。そのなかで「学校現場でのこのよう

* みよし市立三好中学校

本論文は椋山女学園大学教育学部紀要の投稿・執筆規程2に基づき査読を受けた（2019年11月12日受付；2019年12月25日受理）

な取り組みは、系統立った組織的なものにはならず、指導する教師の力量に左右されがちである」と述べている³⁾。山形が示唆するように、学校行事の実行委員会を組織する事例もないわけではないが、筆者の中学校における20年間の勤務経験からは、中学校の学校行事を実行委員会組織のように生徒の主体性に基づいた活動にすることは決して多くなく、活動時間の確保の難しさや行事の成否に関する不安感から、既存の委員会が「下請け」的に学校行事の準備・運営に協力する等、例年に沿った形式的な行事にしようとする人が多いようであった。

本稿は、学校行事の準備・運営に生徒や生徒の組織がいかに関与すべきかについての研究の間隙を埋めるとともに、生徒会組織と実行委員会をどのように組織すれば継続的・安定的に生徒の関与が得られるのか、こうした運営形態がいかに学校行事の充実と、学校生活の活性化に寄与し、生徒の資質・能力を育てることになるのかについて、愛知県みよし市立三好中学校がH25年度から続けている実践について具体的に紹介することを目的とする。なお、三好中学校は愛知県の郊外にある古くからの住宅地にある生徒数約550人の中規模校で、生徒は比較的落ち着いた学校である。

2. 生徒会の組織と概要

(1) 生徒会組織の構成と実行委員会の位置づけ

本校の生徒会組織図を図1に示す。決定機関として年間二回実施される生徒総会（全校生徒参加）と、生徒会役員（7名）・各委員長（9名）・学級代表（32名：級長・副級長の2名）が参加する生徒議会（48名程度の参加者、月一回程度実施）がある。

常設する委員会は、生徒会役員、専門委員会（生活、給食、図書、保健、体育、広報、清掃、福祉、国際交流の9種類）、学年運営委員会（学年を運営する委員会とし

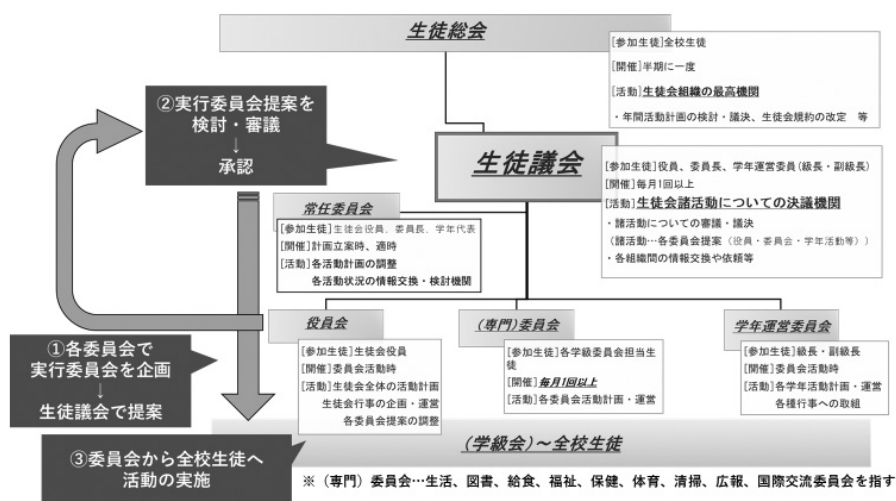


図1 生徒会組織と実行委員会の提案～実施までの流れ

て級長・副級長が所属）とで構成される。また、情報交換・各活動の調整を主とした常任委員会（役員・委員長・議長・副議長で構成）が設置されている。全校生徒は一年間で一回以上、いずれかの委員会へ所属し、生徒会活動を経験する。

一方、実行委員会は目的を達成するために各委員会より提案され、対象となる生徒から募集し、有志によって一定期間内に運営される臨時的組織として位置づけされている。例えば、本校で実施されている学校行事（体育祭、文化祭）の実行委員会は、役員会による企画であり、役員会が生徒議会で提案し、承認されることで運営が開始される。このような実行委員会は規模の大小はあるが各委員会により適時企画・提案することができる（役員会…3年生を送る会、中学校説明会、学年運営委員会…学年レク、花いっぱい運動など）。

(2) 生徒会活動の流れ

生徒会活動は大きく分けて前後期の生徒総会を節目に創設期と活動期に分けられる。

委員会の創設の流れは生徒会役員（選挙による）及び委員長の選出に始まり、各組織の活動計画の作成、検討、承認までが大きな流れとなる。

生徒会活動が活動期に入るまでに委員会、生徒議会、各学級（審議会）、生徒総会と、全校生徒が様々な立場で活動方針について検討する。一人一人の意見が反映されていくことで、生徒会活動が学校を運営し、生徒の学校活動へ還元されていくことを体験的に知ることができる。

(3) 生徒議会の役割

活動期に入ると、月に一回、委員会と生徒議会（図2に様子を示す）が行われる。生徒会活動のそのすべて（役員、委員会含む）は決定機関（生徒総会・生徒議会）で承認されることで初めて実施することができるよう設定されている。前後期のはじめに各一回ずつ行われる生徒総会では主に各委員会の活動方針（計画含む）および日常的に行われる活動（常時活動）について審議される。それ以降は生徒議会がその役割を担い、それぞれの委員会で実施したい活動（強化週間やキャンペーン活動など、実行委員会もこれに含まれる）を検討し、適時生徒議会で委員長が提案する。提案された内容は参加者（各委員会・学級の代表者）によって審議され、過半数の賛同により可決される。審議は主に提案内容がねらいにふさわしいか、内容が学校生活の向上につながっているか、活動計画が困難なものではないかなどを審議される。これらの審議事項が実施困難と判断されると、提案が否決されることも少なくない。否決には全面的な改定を求められるものもあれば、提案の部分的な改善を要求されることもあり、その後の委員会で再検討され、次の生徒議会や臨時議会を開催して再提案されることも多い。

このやりとりは、成功体験だけを与えるのではなく、自分たちで主体的に活動を創

造するという自覚と責任感を高めることにもつながり、生徒議会を通して生徒会組織が機能することではじめて生徒自身が学校生活を運営していることを実感させている大きな柱となっている。



図2 生徒議会の様子

3. 実行委員会の組織と活動内容

本校では様々な実行委員会による活動が展開されているが、代表的な事例として、生徒会役員の提案する学校行事（体育祭，文化祭，3年生を送る会，中学校説明会⁴⁾）の実行委員会について紹介する。これは、生徒自身が実行委員会を組織・運営することで、より主体的な行事の運営を目指すものである。

(1) 実行委員会の企画準備

学校行事の数ヶ月前になると、行事の取り組み方について検討し実行委員会の編成について企画準備が始まる。その提案内容は、それぞれの行事に必要な組織（図3を参照）づくりから始まり、その人員と全体方針（目的，計画）及び各係会の担当者や活動方針に至るまで、生徒会役員が特別活動担当教員とともに作成する。この際、担当する教員の役割としては、生徒会活動としての活動量（活動範囲・期間等）の見通しと学校の年間活動計画との日程調整等を主としている。企画案がまとまると、各委員会は生徒議会で企画案を提案し、生徒議会で可決されることで企画を実行に移していく。学校行事規模の実行委員会であっても、他の委員会活動と同様、生徒議会での可決によって初めて活動することができる。こういった手順を通して、実行委員会はいくまで「生徒会活動の一つとして、各委員会（今回は生徒会役員）からの提案による実施」という位置づけが全校生徒に周知される。同時に、今回の提案者である生徒会役員を実行委員会の下部組織の責任者として適時位置づけることで、実行委員の募集から実行委員会活動全体においてもその基本方針や計画の調整等を円滑に行うことが可能となっている。

(2) 実行委員会の組織づくり

学校行事の実行委員会組織及び活動計画は生徒会役員から生徒議会で提案される。

提案の冒頭では、「生徒の手で文化祭・合唱コンクールを作り上げ、一人一人が積極的に参加できる」「実行委員の活動で新たな自分を見つけたり、今後の成長へとつなげたりする」といったねらいが示されている（前期生徒会役員，H30年度文化祭実行委員会提案による）。本来教員が主導していた一人一人の自己有用感や個々の成長を，実行委員会の運用のねらいとして生徒自身の言葉で位置づけられていることに大きな意味をもつ。

次に，体育祭・文化祭の組織の様子を図3に示す。たとえば体育祭では「競技」「演技」「運営」「宣伝」といった大分類があり，その下部組織に「トラック審判」「生徒会種目」「全校演技」等，それぞれのスタッフ活動が位置づけられている。生徒会役員7名がそれぞれの大分類の担当者として活動計画を企画し，募集により集まった参加者を束ねて活動を運営する。このように多種多様な係会があることによって，多様な生徒のもつそれぞれの関心や個性・長所を発揮する場面が生まれ，学習や運動だけでなく，活躍する場が学校生活にあるという安心感や居場所がうまれる。

H30 体育祭・文化祭実行委員会 募集人数					
No. 実行委員会名	スタッフ名	人数	担当教師		
1	トラック審判・記録	各クラス	文化祭実行委員会	係名	主な活動内容
2	本部記録				担任 生徒
3	監察			進行・運営 ()①	開会式、閉会式の練習
4	器具	各クラス		全体 司会・進行 ()②	司会・アナウンスの練習
5	生徒会種目			上手・下手	指導(上手・下手)
6	召集・誘導			会場運営 ()③	入退場、立ち位置の把握
7	全校演技	3年		舞台設置・運営 ()④	ひな壇、舞台、ピアノ等のセッティング
8	応援リーダー			曲目スライド ()⑤	曲目スライド作成・運営
9	開閉会式			宣伝 ()⑥	宣伝・募集活動、会場設置運営計画
10	救護			プログラム作成・運営 ()⑦	配布用プログラムデザイン作成
11	賞状			看板作成・設置 ()⑧	看板・立看板作成・設置・回収
12	放送			展示・演説・特別文芸演習部 ()⑨	学級展示依頼・設置・ワークシート計画・回収
13	吹奏楽			合唱練習 ()⑩	全校合唱を中心として合唱力の向上を図る。上級学年との合唱練習から技術向上・全校の一体感をねらい、学年～学級へ還元する。
14	プログラム	3年		合唱練習 ()⑪	各学級ノートリーダー(各ノート×2) (各ノート×3) 3年 返教実務部は責任者・クラス内リーダーは任意
15	美術部				

図3 体育祭・文化祭実行委員会の組織

生徒が主体的に行事を運営している主な行事の実行委員会は，年間を通して，先に記した体育祭，文化祭，3年生を送る会，中学校説明会の4つの学校行事で組織されている（2019年4月末現在）。中学校の一年間の活動予定から計算すると，5月当初に行われる体育祭では，組織作りの準備期間が少なく，生徒会役員が提案する上で，すべてを企画・運営することは困難である。

一方で文化祭は，前後期の境目の時期（本校では前後期制であり10月上旬に修了式，始業式が実施されるため，生徒会役員を始め，生徒会組織全体も後期へと移行する時期となる）に実施されるが，文化祭実行委員会の組織が6月末に前期役員から提案され，文化祭当日は10月末の後期期間に行われる。そこで，本校の文化祭では，9月末の後期生徒会役員選挙で選出された後期役員が承認以降，実行委員会の下部組

組織担当者として合流し、前期役員とともに実行委員会を運営している。このように活動することで、大規模な実行委員会（文化祭実行委員は250名（全校550名）、およそ全校の50%以上の生徒が参加）を細部まで生徒の手で運用できること、前後期の役員引き継ぎ（活動内容・方法）が実行委員会活動を通して行われる等の利点が挙げられる。

また、12月の中学校説明会（小学校3校へそれぞれ20名程度の1,2年生が参加）、2月末の3年生を送る会（1,2年生で実行委員会が組織される）では、生徒会活動の主体となっていた3年生から1,2年生へとバトンをつなぎ（後期役員、各委員長は2年生から選出され、3年生が部活動からも引退しているため、学校全体を2年生が主体的に活動する時期となっている）、初めて活動を企画するチャレンジ場面となっている。次年度に入学する下級生のため、また、上級生へ感謝の気持ちを育てるため、それぞれの活動にねらいをもって実行委員会活動を展開する。

これら4つの実行委員会はそれぞれに活動の役割や位置づけが異なり、一年間を通して生徒会活動及び学校行事を推進する活動として運用されている。

(3) 実行委員会の活動の流れ

実行委員会の活動は大きく分かれて準備・活動・まとめの3つの過程で行われる。

準備は行事当日のおよそ2～3か月前から行われ、生徒会役員から組織構成、各学級での募集依頼から始まり、各係会での活動事項についての提案が生徒議会で行われる。生徒議会で決定、依頼された内容は朝や帰りの会を利用して各学級で活動が行われる。

活動は2か月程度の期間内におよそ4～5回程度開催され、月・木曜日の授業後（本校では月・木曜日の午後は部活動がないため開催しやすい）もしくは始業前に行われる。このスケジュール調整は年度初めの段階で、特別活動担当が予め活動を見越して年間計画に組み込むことで他の活動との重複を避けている。また、活動の立ち上げに全体会を行い、活動のねらいやスケジュールの見通し、また活動を通して利用する「ライフスキルアップカード」についての説明が行われる。全体会以降は各係会活動がそれぞれの担当生徒によって運営され、各回に担当教員と打ち合わせをしながら活動の微調整が行われる。本校でのこれらの行事は前日準備から当日の運営・片付けに至るまで、そのほとんどを生徒の手によって行われる（閉会式の最後の挨拶を実行委員長が務める）。

それぞれの行事当日を終えると、実行委員会全体会を開催し、これまでの活動を振り返り、互いに感謝あいながら、参加生徒全員で集合写真を撮って実行委員会活動のすべてを閉じる（図7を参照。体育祭実行委員会全体会の様子）。

(4) ライフスキルアップカードの利用

行事の運営スタッフとして参加する生徒の多くは、たとえ自主的に立候補して参加

している実行委員であっても、その活動目的の主な理由が「行事を成功させるため」「学校をより良くするため」だけを考えたり、自己犠牲的な感覚で貢献する活動になることがある。これは、指導する教員にも同様の感覚に陥りやすく、参加する生徒一人一人の成長は活動を終えて「結果として成長した」程度に終始してしまう。

そこで、実行委員会活動を単なる行事の成功のための組織ではなく、「行事をより良いものにする喜び」と、そこから生まれる「誰かの役に立てるうれしさ」を得ることと同時に、生徒一人一人が自身の成長を図る場面として在ることを目指し、活動期間を通して利用する「ライフスキルアップカード」を作成した。

年度を重ねるごとに改善を図っているが、主な内容は図4を参照とし、利用方法については以下に紹介する。

活動の初期に行われる実行委員会全体会で説明を聞き、①動機、②参加歴、③活動前の自己分析を記入する。同時に、④中間振り返りにあるライフスキルのグラフ中「前」の部分グラフで示す。各項目は生徒の成長に必要と思われる項目を作成し（「こつこつ努力」「積極性」「アイデア提供」「リーダーシップ」「仲間と協力」「経験を活かす」「（ ）…自由記述」※これらも年度によって変更が加えられている）、活動を通して成長させたい項目を視覚化する。

活動期間中に④中間振り返りを行い、現在の状況・今後の課題を記入し、仲間からアドバイスを記入してもらい、活動を終えると、⑤活動後を記入し、自身の成長した部分を振り返り、これからの生活に活かすことを考えさせる。

活動全体を通してこのカードが自身の成長を確認し記録するためのツールとなっている。同時に、すべての記入時には仲間からのアドバイスやコメント記入を設定している。仲間から努力を認められることは、生徒自身の自己有用感を高める効果にもつながっている。

Life Skill Up Card

このカードを自分の記録の記録として使い、自分の成長を促すものとする。

実行委員会名 () 期 () 先生 ()

①参加動機

②参加記録
(実行委員会)

③活動前の自己分析
+ (友達からのメッセージ)

④中間振り返り
ライフスキル確認
活動前
活動後

⑤活動後
生活への還元

自分を見つめて1～自己分析～

自分を見つめて2～振り返り～

ライフスキル確認

こつこつ努力

積極性

アイデア提供

リーダーシップ

仲間と協力

経験を活かす

（ ）…自由記述

友達からのアドバイス

活動を終えて (自分の力が高まりましたか?)

自分はこの活動で成長した!

友達からのメッセージ

生活への還元

自分はこの活動で成長した!

友達からのメッセージ

生活への還元

図4 ライフスキルアップカードの概要

(5) 実行委員会が失敗に陥らないためのコツ

実行委員会の活動は生徒の活動意欲や主体性、生徒自身の個性や創造力を活かすことができる。一方で指導の過程を誤るとその活動を含め行事全体がいわゆる「やられる」活動となってしまう。同時に、行事当日が無事に終わることばかりに意識が向き、活動過程にある教育効果を軽視した行事になれば、昨今の教員の働き方改革による教育活動の削減対象となることは現職教員なら誰もが想像できる。そのようにならないためにも、本校での実践を通して感じた「失敗しないためのコツ」を私見ではあるが述べていきたい。

① 教員間の足並みを揃える…特活感覚の共有化を狙った「大人の実行委員全体会」

主な行事の実行委員会では、実行委員会全体会を行う前に担当となる教員たちで事前打合せ（「大人の実行委員会」と命名）を開催する。これは以下の順に行われる。

まず、「実行委員会」としての教員の立ち位置（指導方針）を共有する。特に、本校の特別活動の指導理念「自分たちの社会（学校）は自分たちで創ることの楽しさ」を体现するための姿勢である。生徒の成功や効率化を優先させることよりも、生徒の提案する企画の良さを見出し、失敗や苦労を見越した先にある充実感を提供することを大切にしてほしいことを伝える。指導に迷ったり不安になったりするときに立ち返る原点としてこの価値観を共有する。

次に実行委員会を通して活用する「ライフスキルアップカード」について説明を行う。生徒同士がコメントをもらう手順は先述したとおりだが、同じタイミングで担当教員からもコメントを記入するように依頼している。記入から提出の機会に仲間と教員から活動の様子を認めてもらうことで、生徒の活動意欲や自己有用感の向上を高めることをねらいとしている。活動全体を通して配付～回収を繰り返すサイクルを円滑にすすめるため、その時期と記入方法の共通理解を図る。

その後は、大分類ごとに別れ、それぞれのスケジュールの見通しを確認する。この時点で生徒会担当者が生徒会役員と打ち合わせている状況を伝えながら、生徒の進める活動の程度とスケジュール上の最低限の期限とを把握する。生徒がすべて企画・運営するためには、担当する教員がスケジュールの見通しを前もって把握していることが必須である。生徒に活動を預けながら、状況に合わせて指導体制を調整することが、実行委員会の確実な運営につながる。

そして、最も大切なことは、「大人の実行委員会」としても、生徒が自分たちで取り組む姿を支えることを楽しんでもらいたいということである。生徒が充実し、創り上げる楽しさを味わうためには、何よりも教員が楽しんでほしい。楽しんでいる姿こそ、生徒に示したい姿勢である。

② 参加生徒の特徴「自ら進んで参加している生徒集団である」を捉える。

実行委員会に参加する生徒は自主的に立候補し参加している点が大きな特徴となる。本校では委員会活動には年間を通して一度はいずれかの委員会に所属し、学校の生徒会活動に参加することが定められている。全ての生徒が生徒会活動に参加する意

義はあるものの、「やらなければいけないから」「やらされている」などの感覚をもつ生徒も少なくない。担当する教員の力量によっては多くの生徒がすすんで活動に参加することもあるが、そうならないことも多い。全員参加という仕組みは社会参画の視点からも教育的配慮の一つであるが、全員参加した委員会や係活動が活気に溢れている状況はどの学校もが目標として目指している理想的な状況である。

一方で、実行委員会は、生徒の手で提案され、希望者が参加する体制をとるため、「やらなければいけない」感覚が非常に少なく、ほとんどの生徒が前向きに参加している状態である。生徒の活性が高く、企画に対して前向きに関わりたい生徒を信じて、一人一人が活躍できる場面を惜しみなく与えていくことで、充実感に変えることができる。ライフスキルアップカードの記入の様子を活動の参考にして、担当生徒にアドバイスすることもよいだろう。

③ 行事当日の見栄えよりも過程の在り方、一人一人がどう関わったかを大切に。

行事には多くの来賓や保護者が参観することが多いため、活動の見栄えを意識してしまうことがある。来賓・保護者に接することの多い教員こそ、そう考えてしまいやすい。しかし、全校の半数を占める実行委員会のすべての生徒がそれだけを望んでいるのではない。学校行事が生徒一人一人にとって充実し、意義深い活動であるためには、一人一人が思いをもって活動に参加していなければならない。実行委員会とは、街の大きなイベントに遊びに行く感覚ではなく、自分たちで学校行事に対し、スタッフとして企画運営し、主役として参加し、学校文化の一つになっていくことである。その自負を得るために、行事の華やかさよりもそこで活躍するスタッフや参加する生徒の自信に満ちた表情を大切にすべきである。

4. 生徒会活動による実行委員会を中心とした学校行事の効果

(1) 実行委員を経験した生徒の変容

①実行委員会へ参加した生徒の動機

H27年度から H30年度までの体育祭および H29年度の文化祭実行委員会に参加した生徒のライフスキルアップカードに記入した参加動機の様子を図5に示す。このように前回までの様子と比較することで、行事の実行委員会に参加しようとする生徒が実行委員会にどのような期待を持っているかを推し量るチェック機能をもつ。

実行委員会に参加しようとする生徒の動機が年度を経て以下のように変化している。体育祭についてみると、H27年度、H29年度では「興味があったので、やってみたかった」が最も多く、それ以降は、「この活動をよいものにしたいから」「自分の力を発揮したい、伸ばしたい、チャレンジしたい」と同程度になってきている。同じ行事であっても経年により生徒・教員の実践力向上に伴った実行委員会活動の質的向上が図られている可能性がある。

また、この期間においては、「この活動を良いものにしたいから」項目が高くなっ

てきている傾向がある。単なる興味・関心や勧められての参加など受動的に参加するのではなく、自分自身の成長や行事の成功など実行委員会へ様々な目的意識をもって参加する生徒が増加していることが推察される。実行委員会へ参加する動機が受動的なものから活動の成功や自身の成長など、主体的に変化することは活動の質を高めることにつながることで同時に、前回までの各実行委員会の活動の様子を見た生徒や体験した生徒の充実した姿を裏付ける証拠ともなり得る。活動計画の改善にもつながる重要な要素である。

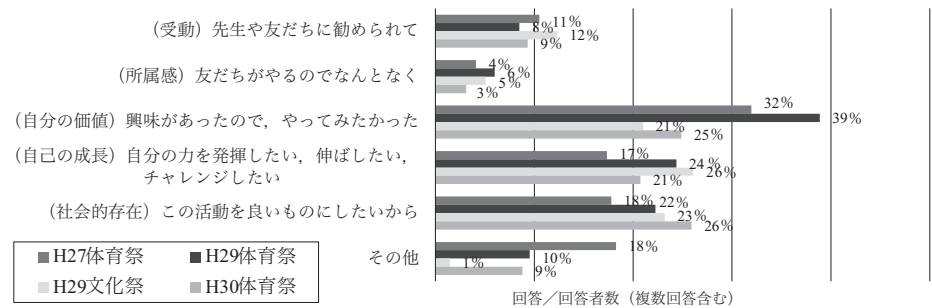


図5 実行委員会への参加動機

②全校意識調査「誰かの役に立ててうれしい」項目の変化

全校で年間3回行っている意識調査には、項目「誰かの役に立ててうれしい」がある。H28年度から2年分の結果を図6に示す。また、図5で示したH27～H30体育祭は5月末、H29文化祭は10月末に実施されている。各行事を経て時期が進むにつれ「当てはまる」回答割合が増加している。H28.7月と比較すると、H29.7月以降の3回ともに5%水準で有意差⁵⁾が見られた。全校規模で年間3回実施される行事と長期間にわたる実行委員会活動がこの結果に与える影響は少なくない。

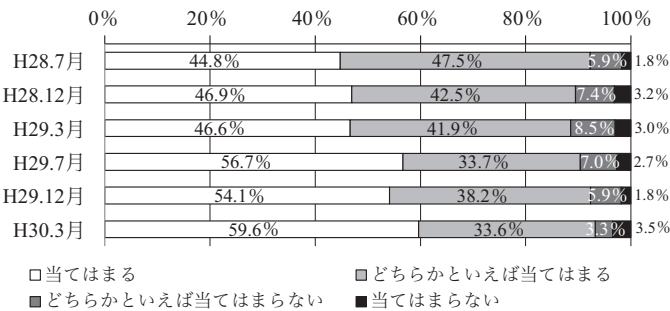


図6 意識調査結果「誰かの役に立ててうれしい」項目

(2) 生徒の声を聞き、自分たちで成長する姿

生徒議会で文化祭の実行委員長が次のように話している。
「一人一人が文化祭への意識を高くし、全校が文化祭へ望めるようにしたい。」

度きりの大舞台で成長したと感じられるように、生活に生かしていけるようにしたい。」

また、体育祭の全校演技担当として参加した生徒は活動を通して成長したい自分を「人の前に立って自信をもって声を出せるようになりたい。集中力をつけたい。」と述べ、活動を終えて「仲間にアイデアを提供することができた。集中力が前より高くなった。（「自分はここが前より成長した」より）」「学習では長く勉強が続けられるように、集中力を活かしたい。学級では誰かにアイデアを提供していきたい。（「こんな点をこれからの生活でいかしたい」より）」と記している。実行委員会をとおして、より良い行事を目指すことと同時に自身の成長を図ることを生徒の間で共感している様子が見られた。

5. 本研究のまとめと今後の課題

これまで述べたように、実行委員会が生徒自身によって組織され、生徒会活動の一環として提案・審議することで、主体的な活動として機能しているが、これは同時に組織づくりの段階からその様子を知ることができるため、生徒間による実行委員会の企画運営が引き継がれる効果ももたらす。生徒会活動そのものが継続的・安定的な組織の運用にもつながっている。また、学校行事の運営として始まった「実行委員会」が、小学校との交流活動等（「中学校説明会（H27～）」「学習交流会（H31～）」など）を実施するために組織されている。学校生活をよりよくするために主体的に組織を利用し、参加希望生徒は自分自身の資質・能力を生かしたり、向上させる目的も併せながら参加することができる。全校生徒を巻き込んだこうした取り組みは、学校生活の活性化にも大きく寄与する。

一方で、生徒の主体性に委ねているために起こりうる課題点もある。

一つ目は時間の確保である。生徒が主体的に取り組むためには相応の活動時間が必要となる。現在行っている実行委員会活動は全体会が2回と係会の活動が4～5回である。限られた時間内で活動を行うためには、朝の始業前や授業後の部活動時間帯を利用している。部活動時間の削減が進む本校でも活動時間の捻出は容易ではない。

二つ目は生徒の負担と充実感のバランスである。学校での活動時間が限られるため、家へ持ち帰っての作業も少なくない。活動のすべてを生徒に任せることがすべて良いわけではない。企画～運営の中で、最も効果が高く充実感に変わる場面を生徒に活動させることが望ましい。負担が大きく充実が変わりづらい活動が続けば実行委員会の印象も低下するため、避けたいものである。

三つ目は教員間の共通理解である。学校文化の特徴として、集団としての生徒の価値観や文化は変わりにくいが、教員集団は入れ替えが多く、教員一人一人の影響力が強い。そのため、集団の気質・雰囲気は年度により変化しやすい傾向がある。限られた時間内だからこそ、効率を重視するための簡素化・教師主導に陥りやすい。大人の実行委

員会のように、教員集団が共通理解を図り続ける姿勢が大切である。

特別活動は生徒一人一人を成長させ、学校生活そのものを支える重要な領域である。学習や諸活動、生徒一人一人の経験をつなぎ、自分たちの生活する社会を創造・発展させる体験を、生徒の手に委ねた行事・実行委員会活動をととして今後も経験させていきたい。



図7 実行委員会を終えて集合写真（ライフスキルアップカードを手に）

謝 辞

本研究にご協力いただきました三好中学校特別活動指導部の皆さま、生徒の皆さんに心より御礼申し上げます。また、本論文をまとめるにあたり、山田真紀氏（嵯山女学園大学）をはじめ、日本特別活動学会特別研究プロジェクトA「未来研」のメンバーに有益な助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

■注

- 1) 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』より。平成20年告示版では94-95頁に、平成29年告示版では105-106頁に記載がある。
- 2) 平成20年告示版では「学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」であった。
- 3) 山形弥壽子「実行委員会形式の学校行事が中学生の学校生活に関するスキルに及ぼす影響—過程及び効果に関する実証的研究—」兵庫教育大学『学校教育学研究』第26巻，2014，pp. 57-61.
- 4) 中学校説明会は平成28年度より生徒会活動の一つとして実行委員会化され，1，2年生が参加している。
- 5) H28.7月と以下の各月との χ^2 検定結果は次の通り。 χ^2 検定 H29.7月 $\chi^2=19.9$ 自由度=3 $p<0.01$ ，H29.12月 $\chi^2=9.6$ 自由度=3 $p<0.05$ ，H30.3月 $\chi^2=28.9$ 自由度=3 $p<0.01$